R０７_１００３ 校長室の窓から

「自由」とは

　ある日の６年生の教室。黒板に書かれた問いが目に飛び込んできました。「自由を感じるときは？」。休み時間に遊ぶとき、夏休み、家でゲームをしているとき。日常の生活に思いを巡らせながら、思い思いの「自由」を伝え合っています。

　やがて話題は、ユウスケくんが海で泳いでいる話から、「自由とわがまま」というテーマへと移っていきます。海に潜って遊ぶユウスケくんと、その傍らで釣りをしている人。それまで「遊んでいるとき」が自由だと言っていた子供たちの表情が変わりました。果たして、自由とは何か･･･。

　小グループでの話し合いを通して、自分の生活経験にいっそう引きつけて考える様子が見られました。他者の意見に触れることで、「自分の自由は他者の自由とつながっている」という理解へと近づいていきます。さらに「学校は自由か、不自由か」というメインテーマへ。問いが一歩ずつ深まるたびに子供たちの熱量は増しつつも、教室はどこか澄んでいくのを感じました。

道徳の学習では、議論を通して自分の考えを深め、道徳的な心情を育てることにねらいがあります。その大前提となるのは、教室に「語り合える風土」があることです。自分の意見を言うことが恥ずかしくなってくる年ごろ。間違いを恐れて、積極的な挑戦から遠ざかることもあります。しかし本校の６年生は、根拠をもって主張を伝え合っています。実に頼もしい６年生です。担任もまた然りです。　教室が、自由に発言できる安全な場所なのです。だからこそ、清々しく切磋琢磨できるのでしょう。

　さて、「学校は自由か否か」をめぐる議論は白熱していきました。「学校は不自由である」という意見が多く出てくる中、「学校は１００％自由である」と主張する児童がこう言いました。「それなら、皆さんは、なぜそんな不自由な学校へ来ているのですか」と全員に問い始めました。空気が動き始め、自分たちで走り出した瞬間でした。教師は「伴走者たれ」と言われます。自分の言葉で仲間と語り合い、議論交わし、考えが変化していく。「自由とは？」という問いに対する往還が、子供たちの中で繰り返されます。「自走」し始めた子供たちを、担任は優しく見守ります。ここ三宅島に「教育の原点」を見た気がしました。

　窓の外、秋の風に草花が揺れています。風は目に見えないけれど、草花の動きでその存在がわかります。自由もまた、目に見える形をとるときに本物になるのでしょう。これから、子供たちはどんな行動で「自由」を示すでしょうか。学校、家庭、地域で。私たち大人は、急がせず、脅かさず、しかし確かな背中で見守りたいものです。

私も「自由」について、自身の生活を　ふりぃ　返ってみようと思います。